

2023年12月10日アドベント礼拝

『飼葉桶』

ルカ2:1~7

聖書本文

- 1 そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。
- 2 これは、キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の住民登録であった。
- 3 人々はみな登録のために、それぞれ自分の町に帰って行った。
- 4 ヨセフも、ダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。
- 5 身重になっていた、いいなずけの妻マリアとともに登録するためであった。
- 6 ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、
- 7 男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。

導入

蠟燭に2本、火が灯りました。私たちは今、アドベント2週目を過ごしています。私たちに与えられた救い主イエス・キリストの誕生に思いを寄せる時です。クリスマスの喜びをともに分かち合いたいと思います。

さて、今日のみことばですが、この記事はイエス様が生まれた時のことです。イエス様は生まれてから飼葉桶に寝かせられました。こう聞くと、このような場面が思い浮かぶ方が多いのではないのでしょうか。【写真】この写真は昨日行われたマナ愛児園のクリスマス会で飾られたものです。もうマナ愛児園のクリスマス会といえば、という感じで長い間飾られている絵なので、見かけた方も多いと思います。優しく可愛らしい絵ですよ。イエス様が生まれた時の様子を思い浮かべるとこの写真と似たようなイメージが浮かびます。どこか神々しいような光が溢れていて、暖かくキラキラした、そんなところでイエス様はお生まれになったのだ、と。



ですが、そのようなイメージはちょっと置いておいて、今日はもっとイエス様の誕生を現実的に考えてみましょう。私たちはイエス・キリストが約 2000 年前にこの世で生まれたということを歴史上の事実として受け止めます。だから 2000 年前にどんなことが起こったのか、ということを実実に基づいた視点で見たいと思うのです。なぜイエス様は飼葉桶に寝かされたのか、そして、その事実が今を生きる私たちに伝えることとは何かを確認していきましょう。

本文1:飼葉桶

1~5節のみことばを読んでもみると、イエス様の両親であるヨセフとマリアは住民登録をするためにベツレヘムに戻って行ったということがわかりますね。ナザレからベツレヘムまでは約 130km。彼らはその距離を移動したことになるのです。この移動について少し気になることがあります。それはマリアがともに移動したということです。当時の状況を鑑みると、マリアはわざわざ住民登録をするためにベツレヘムに行く必要はありませんでした。家長であるヨセフだけが行って登録するだけでも十分だったはずですが。それなのに、大きなお腹を抱えて130kmという長い道のりを移動したということになります。なぜこのようになったのでしょうか。その答えは**ミカ5:2**にあります。

**2 「ベツレヘム・エフラテよ、
あなたはユダの氏族の中で、あまりにも小さい。
だが、あなたからわたしのために
イスラエルを治める者が出る。
その出現は昔から、
永遠の昔から定まっている。」**

救い主であるイエス様は生まれるということは、あらかじめ預言されていたことです。そして、その預言ではイエス様はベツレヘムで生まれることになっています。だから、ヨセフとマリアはともにベツレヘムへ行ったのです。イエス様は生まれる場所まで預言されていました。ここまで預言の通りに生まれてきたイエス様ですが、しかし、その生まれ方はとても救い主とは思えないものでした。7節のみことばをお読みいたします。

7 男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。

救い主であるイエス様。王の中の王であるイエス様。そんなイエス様は煌びやかで豪華な王宮の玉座ではなく、飼葉桶に寝かされることになったのです。飼葉桶とは牛や馬などの家畜の餌を入れるためのものです。**【写真】**このようなものです。木や石をくり抜いて飼葉を入れていたものを飼葉桶といい、家畜はここに頭を突っ込み、口をつけて飼葉を食べることになります。家畜の涎や土などが常についているので、いくら綺麗にしたところでこびりついた汚れはそうそう落ちるものではないでしょう。この飼葉桶が置かれていた場所については様々な憶測があります。馬小屋だったとか、家畜小屋だったとか、家と家畜小屋が一体となっていた建物だったとか、または洞窟だったとか。いずれにしろ人が住むようなところでもなければ、絶対に生まれただけの赤ん坊を寝かせたくなる場所ではないのです。確かなのは、飼葉桶に寝かされているということは貧しさ、卑しさ、汚さ、さらには拒絶といったものをするしていると言えるのです。イエス様が寝かされる場所はそんな飼葉桶しかなかったのです。



本文2:イエスを尋ねた人々の喜び

しかし、そんなイエス様を訪ねてきた人たちがいます。そして、飼葉桶に眠っているイエス様を見て、喜び賛美をした人たちがいるのです。続く、**ルカ2:8~20**

8 さて、その地方で、羊飼いたちが野宿をしながら、羊の群れの夜番をしていた。

9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。

10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。

11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。

12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あな

たがたのためのしるしです。」

13 すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。

14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。

地の上で、平和が

みこころにかなう人々にあるように。」

15 御使いたちが彼らから離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは話し合った。「さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう。」

16 そして急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当てた。

17 それを目にして羊飼いたちは、この幼子について自分たちに告げられたことを知らせた。

18 聞いた人たちはみな、羊飼いたちが話したことに驚いた。

19 しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。

20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

救い主が生まれたという知らせは、夜番をしていた羊飼いたちに知らされました。彼らは天使の歌声を聞くと、立ち上がり、ベツレヘムに向かいました。さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださった、喜びの事実を確認しよう！実は羊飼いというのはとても大変な職業なのです。一年中休む間もなく羊のために働かなくてはなりません。春は羊たちの出産の季節です。生まれたばかりの子羊はとても弱いので死んでしまわないように細心の注意を払わなければなりません。夏には羊たちをたくさん食べさせるために緑の牧場を探して歩き回ります。重労働である羊の毛刈りも夏に行なわれます。秋には冬に備え、少しでも気温の高い低地へと羊を大移動させます。また、冬の餌である枯れ草の準備もします。冬には餌も少なく、天候が厳しくなるので、羊たちが死なないように常に気を配っていきなくてはなりません。もちろん一年、羊たちが中病気や怪我にならないように注意し、野生の獣に襲われないように気を付けている必要があります。一年中働き通して気が抜けない職業、それが羊飼いなのです。さらに、2000年前の羊飼いたちは卑しい者として扱われていました。ほとんどの羊飼いたちが自分の羊ではなく、委託された羊を安い賃金で守っていたのです。いくら頑張っても身分が上がることもない、社会の最下層の職業、それが羊飼いでした。

この時の彼らは野宿の最中でした。眠ることなくいのちがけて羊たちを守っている最中でした。おそらくこの日も必死に働いてくれたことなのでしょう。眠くて仕方なかったのかも

しれません。救い主が生まれたからといって、今日の仕事がなくなるわけでもありません。しかし、それでも、彼らは、“さあ、ベツレヘム”と、救い主に会いに行きました。不安、恐れ、不満、疲れ、乾き、忙しさなど、すべての言い訳をおいて、何よりも飼葉桶に眠る救い主に会いに行ったのです。結果、彼らは神をあがめ、賛美をしました。救い主が与えられた喜びを抑えられなかったのでしょうか。飼葉桶であっても、そこにイエス様がおられるなら、飼葉桶こそが喜びの場へと変わっていくのです。もう一箇所確認してみます。**マタイ2:9~11**

9 博士たちは、王の言ったことを聞いて出て行った。すると見よ。かつて昇るのを見たあの星が、彼らの先に立って進み、ついに幼子のいるところまで来て、その上にとどまった。

10 その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。

11 それから家に入り、母マリアとともにいる幼子を見、ひれ伏して礼拝した。そして宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

東方の博士たちもまた、イエス様に会いこの上もなく喜びました。彼らがイエス様に出会ったのは正確にはわかりませんが、イエス様が生まれたばかりの頃から3歳までの間であると考えられます。また、東の方、とありますが、これがどこを指しているのかもまた、正確に知ることができません。おそらく外国からやってきた人たちであったことでしょう。東方の博士たちは少なくとも一つの国を跨いでイエス様に出会いにやってくるのです。移動手段もままならない時代の話です。彼らが国を超えて旅をするにはたくさんの困難があったことでしょう。彼らはそれでもイエス様に出会うために旅をしたのです。博士とは、星を見て占う、占星術師であり、東方の多くの国で王の助言者として重要な役割を担っている人たちだったのです。だから、イエス様の誕生を知らせる星に気がつき、星に導かれ、長い距離を、時間をかけて旅をすることができたのです。おそらく自分たちの国で大きな権力を持っていた人たちだったのだらうと考えることができます。

そんな彼らが、王宮で生まれたのではなく、飼葉桶に寝かされていたイエス様に黄金、乳香、没薬を贈り物として献げました。旧約聖書によると、黄金、乳香、没薬というのは王様への献上品であることがわかります。彼らは王へ献げる物を、当時の王であるヘロデ王にではなく、イエス様に献げているのです。飼葉桶に寝かされたイエス様を

飼葉桶。それは、汚く、卑しく、貧しく、何も手にしていないものを象徴します。しかし、イエス様が寝かされているのなら、その飼葉桶は喜びへと変わります。玉座に座る者が王になる

のではありません。王が座る場所こそが玉座になるのです。イエス様がおられるその場所、イエス様が眠っている飼葉桶こそが玉座になります。イエス様が眠っている飼葉桶こそが喜びの場となるのです。羊飼いたちの喜びは、東方の博士たちの喜びは、飼葉桶に寝かされているイエス様に出会ったからでした。イエス様が眠っておられる飼葉桶はもはや、ただの飼葉桶ではありません。人々を喜ばせ、玉座のように尊いものへと変えられたのです。たとえ汚くても、卑しくても、貧しくても、何も手にしていないと思えても、誰からも拒絶されるような存在であったとしても、インマヌエルの主、救い主がその中におられるなら、喜びの存在、尊い存在へと変えられるのです。

本文3:飼葉桶と私たちの共通点／私たちから伝わる喜び

飼葉桶が喜びへと変えられる。このことを思う時、私は自分自身のことを考えずにはいられません。私自身が飼葉桶のような存在に思えて仕方がないからです。自分の内面に目を向けてみます。すると、自分の汚さ、罪深さ、卑しさ、弱さ、心の貧しさ、そんなものが挙げれば切りがないほど出てくるのです。誰もこんな私を愛することはできないだろう。私できえも私を愛することができないかもしれない。もしかしたら、神様も呆れてしまうのではないか。家畜小屋の飼葉桶の方がまだ綺麗ではないか。そんな思いが出てきてしまうのです。しかし、聖書はこう、語りかけてきます。**エペソ2:1~6**

- 1 さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、
- 2 かつては、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。
- 3 私たちもみな、不従順の子らの中にあって、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。
- 4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、
- 5 背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。
- 6 神はまた、キリスト・イエスにあって、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。

この聖書のみことばによれば、イエス・キリストがこの世に来られた理由が、私たちを救う

ためであると言います。生まれながらに神様の怒りを受け、罪の汚れの中で死ぬ以外の可能性がなかった私たちに与えられたのが、イエス・キリストなのです。飼葉桶のような私たちにイエスが眠ることによって、死から永遠のいのちを得ることができるようになりました。滅びから復活を得たのです。そして、それはただただ恵みによるものです。私たちが何かを成し遂げたからではなく、神様の大きな愛によって、イエス様は私たちに与えられました。そのため、私たちはイエス様とともによみがえり、神様と交わりができるようになりました。罪の中で滅びに向かっていた私たちは、神様と何の接点もない存在でした。暗闇の中をただただ歩んでいる者、まさに飼葉桶のような存在だったのです。そんな私たちに与えられた光、そんな私たちに喜びの存在へと変えてくださったの、イエス・キリストなのです。イエス・キリストを私たちの中に迎えることによって尊く聖い存在へと変えられたのが私たちです。

最近、こんな質問を受けました。クリスマスの1番の思い出はなんですか?というものです。みなさんにはどのような思い出があるでしょうか。私の1番の思い出は、高校生の時にキャロリングに行った時のことです。私の母教会は日立にあるのですが、毎年のようにキャロリングをしていました。大甕駅の前で歌った後に、教会員の方のお宅にみんなで伺ってクリスマスソングを歌っていくのです。当時の私はこのキャロリングがあまり好きではありませんでした。自分の声や歌に全く自信がなかったからです。私の母が賛美の好きな人で、家事をしながらよく歌っていました。なんとなく私も一緒になって歌うことが多かったのですが、母に比べると全然下手な自分の歌声が嫌になってきてしまっていたのです。歌が下手だから参加するのは嫌だな、でも、参加しないのも何だかなあ、そんな思い出キャロリングに参加していたのです。

ある方のお宅に伺った時のことでした。ふと空を見上げると、星が溢れんばかりに輝いているのが見えたのです。少し街から離れていた場所だったので、余計な灯りがなく、星が綺麗に見えたのでしょう。あんな満天の星空なんて見たことがありません。目が離せなくなり、星を見上げながら賛美をしました。そしたら、その満天の星空に私の歌声が溶けていくようでした。急に私が上手になったのではありません。実力はそのままです。しかし、それでも私の歌は星空に響き、私は心から感動し、喜んで賛美をすることができたのです。それから、私は賛美が好きになりました。今でも奥さんに音痴だとかよく言われるのですが、それでも歌うことに喜びを感じるのです。

あの時の感動がなんだったのか。なぜあそこまで感動することができたのか。なぜあんな

に喜んで神様を賛美したのか。それは、星空を見て、神様を思ったからに違いありません。星空を通して、天地を造られた神様がおられることを確信したからです。その中で、イエス・キリストを思い賛美したからです。私の中にイエス様を、救い主を迎え入れたからです。歌が下手な私は変わりません。弱く悩みやすい私は変わりません。牧師だとか言っても、罪を犯す私は変わりません。飼葉桶のように汚れまみれになっている私は変わりません。しかし、私の中にイエス様がおられるなら、イエス様の眠る飼葉桶が私であるなら、私は喜びになります。私は尊いものになります。私は喜びを賛美し、どんな姿であっても私を通して、救いを、喜びを伝えることのできるものへと変えられるのです。

結論

クリスマスを思うこの時、イエス様を私たちの中に迎えませんか。たとえ飼葉桶のようだとし、ても、イエス様の眠る飼葉桶になろうではありませんか。苦しんでいる羊飼いたちが飼葉桶に眠るイエス様をみて賛美したように、私たちを通してイエス・キリストを伝えようではありませんか。東方の博士たちによって飼葉桶であっても、イエス様がともにおられるなら、その飼葉桶が玉座に変えられることを、私たちは知っているのです。

イエス・キリストを私たちの中に迎えましょう。そして、喜びへと変えられる私たちでありたいと強く、強く願います。